

PART 1 1 . 新たな船出 人生の第二ステージへ

そうして僕の第二の人生が始まった。

今までの人生は、「アメリカ的なもの」との戦いだった。自分にチャンスを与えたのも、育ててくれたのもそうなら、無謀な積極策でせっかく築いてきたものを一挙にくずしてしまったのも、そのアメリカだった。アメリカには「素晴らしさ」の光の部分と、とてつもない無気味で非人間的な影の部分がある。

ケネディーのアメリカ、マーチン・ルーサー・キングのアメリカ、僕を育ててくれたオーガストやジャックのアメリカは、すでに遠いものとなり、権力と利己と金儲けと、それを正当化する空虚なレトリックが支配する、ジョージ・ブッシュとネオコンの象徴するアメリカが、日本を始め世界を覆いつくそうとしている。

何のために会社を経営するのか、心に芽生えた素朴な疑問への答えを求めて出発した僕の旅は、当然の結果として、「アメリカ的なもの」、その暴走する影の部分と、どう対決したら良いのか、その答えを求め歩く旅になっていった。

スイスの IMD に答えは見つからなかった。アメリカ的な経営手法がヨーロッパでも主流となっていた。IMD で良かったのは、同じ思いを共有する多くの友に出会ったことだ。ヨーロッパの企業経営者の多くが加速する市場原理主義への疑問を抱えて経営にあたっていた。世界の最前線を見るために、ヨーロッパから中国、アメリカのシリコンバレーを回って、さまざまな経営の現場を見たのも貴重な体験になっている。

むしろ、僕の問いへの答えは、予想外にところにあった。

IMD の卒業生と共にボランティア活動で入ったネパールで、偶然に出会った年老いたチベットのラマ僧に、突然両の手で、頭をワシづかみにされ思いっきり揺さぶられた。一切無言のうちに、お前、本当によく来たな、よく来たな、という気持ちだけが、圧倒的な力となってこちらの心の中に入ってきた。手のあとの感覚は何日もの間、頭に残っていた。

それまで、経営学や論理の世界で、答えを探していた僕は、その時を境に、なぜかもっと身近で自分に近いところに、本当の答えがあることを確信することになった。

アメリカ企業社会の中で戦う自分を支えてくれたものは、祖母直伝のサムライの心と、二十代に通った鎌倉報国寺で出会った禅の言葉だった。そこに答えがある。アメリカにも、ヨーロッパにも、加速する「世界」という名の列車を、更に、更に加速するための理屈は

あっても、その列車をどうしたら、人間の制御が可能な、安全な速さにまで落とししていくのか、という知恵は一切ない。それが唯一の世界は日本だった。

日本には、自分の力だけを頼りに戦国乱世を生き抜いたサムライの「乱」の知恵と共に、その後の世界に類例のない平和な二百六十年間を築いた「和」の知恵がある。いかに戦い抜くかというのが「乱」の知恵ならば、戦わずに勝つ、さらには、戦う必要のない世の中を作るのが、大きな「和」の知恵だ。

アメリカは、今、「千と千尋の神隠し」の中の「顔なし」の妖怪のように、自分自身を止めることができなくなっている。政治も、企業も、ただひたすらに、権力と、自己利益だけを追求する、こころが空っぽのゾンビのような人間たちだけが、競争に勝ち残って、富を独り占めにするような社会になっている。アメリカには今、先鋭化する「乱」の心だけがあって、「和」を作る心は見えない。

僕は、アメリカを止められる、唯一の可能性を握っている国は、日本だと思っている。ブータンの王様が、国の価値は、GNP という経済価値基準で計るのではなく、GNH、つまり Gross National Happiness どれだけ国民が幸せか、で計るべきだと言っていた。大賛成だが、残念ながらブータンにはアメリカを動かすだけの力はない。尊敬を集めているダライ・ラマにしても国を持たないから力は限られる。

世界で第二位の経済力を持った国、日本がヨーロッパの国々を動かし、本気になってこそ、はじめて、沈黙したアメリカの良心を揺さぶり動かして、アメリカを止められる可能性が見えてくる。それが 21 世紀の日本と日本人の使命だと思う。21 世紀は人類にとって、決定的な世紀になる。日本が列車を止めなければ、次の世紀はもう来ないだろう。

ネパールでチベットから来たラマに出会って以来、今まで、僕はもう一度、禅と、佛教、東洋思想とサムライの知恵の勉強をし直してきた。僕は今、「アメリカ的なるもの」との戦いに勝つ知恵と、さらには「和」を築く知恵を、日本の若者に、若者たちが分かる言い方で伝えること。また、世界の人たちに対して、彼らの分かる言い方で、それを伝えること、それが、第二の人生における僕の使命だと思っている。

二トだけが問題になっているが、誰も言わないもっと大きな問題がある。

勉強もし、やる気もある、努力をしている日本の若者たちが、誰からの助けも無く、厳しい 21 世紀の「乱」の世界の現実の中で、どう生き抜いたらいいのか、その術を何も教えられないことなく放置されている。僕は今、そんな彼らのためにこそ、力になりたいと思う。